

発達遅滞幼児の事例報告

——流れをテーマにした遊びの経過——

中 沢 た え 子

研究第8部 宮 本 直 子

1. はじめに

T. M. はものが流れ、吸い込まれて行くというイメージが好きである。本児と私とのつき合いは、マンホールに始まりマンホールに終わっている。まだ当分この流れのテーマは続いて行くと思われるが、この1年間充分に、このイメージを求めた本児が、どの様に成長して行くか恐ろしくもあり楽しみでもある。

今回の報告は昭和45年4月から昭和46年3月までの記録と考察である。

2. T. M. の紹介

本児は昭和39年生れの男児で、2才の時、言語遅滞を主訴に来所、知能遅滞か自閉的情緒障害と診断され、1か月毎に来所することになった。3才の時、大学病院で原発性性腺発育早熟症と診断される。4才になってから、当家庭指導グループが担当することになる。

4才時には8名程度の、主に4才児の発達遅滞幼児集団に入り、集団の保育者とは別に本児担当の保育者がついた。保育は週2回、10:00から13:30までで、その間40分程は個人セラピーが保育室とは別のセラピー室で担当の保育者によって行なわれた。5才時には主に5才児を中心とした集団に入り同様の保育が行なわれ、担当の保育者としての私と本児とのつき合いが始まった。40分程のセラピーは6才2か月で打ち切っている。

3. マンホールのイメージの発展と遊び

(1) 経過と作品の要約

第1表参照

(2) マンホールのイメージ

非常な勢いでぐるぐる廻る流れが、吸い込まれ流れ出るというマンホールのイメージは、いろいろな形で本児の遊びに現われている。経過順に列挙してみると次のようになる。

第I期

・箱積木で窓を作り、その窓の外側に数本の積木の柱を並べ内側に大きなボールをのせたものを作る。本児はこれを「カンキセン」と呼んでいた。

・向い合わせた箱型に作ったブロックの上から水を流し流れをじっと見ている。流れに紙片や小ブロックをのせることもある。

・煙突・煙・マンホールを私に書かせる。

・砂場で「マンホール」と呼ぶ穴とそれをつなぐ「ながし」を作る。完成すると水を流して流れを見る。マンホールは浅く、深さが同じであるため、水の流れは穏やかであり、短かく直線的である。(図1、2参照)

・床にマンホールを書く。(図4、5参照)

第II期

・砂場でマンホールとながしを作る。完成すると、乾いた砂を水が流れて行くようにマンホールの上から落としたり、ながしの中に手で押し込んだりすることが多い。穴の深さや流しの位置に高低があり、水を流すと流れは早く激しいぐるぐる廻りになる。(図6、7参照)

・保育室の床にマンホールを書きまくる。1つのマンホールを書いて次に移る時は、手をマンホールに合わせたながしの大きさにまらめて次のマンホールを書く場所まで駆けて行く。(図8、9参照)

・机の上一面に渦巻模様を書く。

・保育室の壁の上部に大きなクーラーモーターや時計を書く。


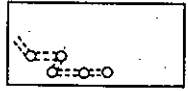



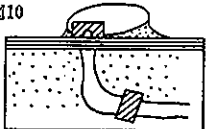
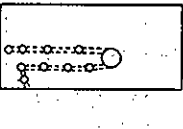
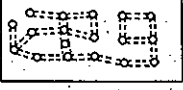
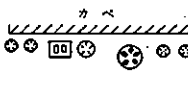



第III期

・砂場の囲いの上に穴を作り、そこから下の砂場まで流しを作る。落ち口にプラスチック積木で門を作り、完成すると、積木を流しに沿って転がす。(図10参照)

第IV期

・砂場でマンホールとながしを作る。沢山のマンホールを作る。穴や流しの位置に高低はなく、水を流すと、流れはゆったりと砂場一杯に広がるようだが、完成しても水を流したり乾いた砂を落とすことはなく、作品自体を満足そうに見つめていることが多い。(図11、12参照)

第 1 表

	第 I 期	第 II 期	第 III 期	第 IV 期
砂場で の遊び	<p>砂を入れた箱の中に水を流し込む。</p> <p>「マンホール」と呼ぶ穴とそれをつなぐ「ながし」を作る。</p> <p>穴の上部にビニールテープをのせたこともある。</p>	<p>殆んど一日中砂場で遊ぶ。</p> <p>地下に潜っている流しではなく、地上にむき出しの流れを作る。</p> <p>プラスチックの積木をトンネルのようにところどころに作っている。</p>	<p>余り熱中せず、穴を掘りながらボンヤリしていることが多い。完成した作品にならないうちに壊してしまったり、他の遊びに移ってしまったりする。</p> <p>レコードをジャングルジムやダイコ橋、ブランコ、鉄棒の下に直線的に並べる。</p>	<p>再びマンホール作りが盛んになり、一日砂場で過す。</p> <p>作品が出来上ると実に満足そうに見る。</p>
砂場で の作品	<p>図1  (注、点線はながし)</p> <p>図2  (注、斜線はビニールテープ)</p> <p>図3  (注、斜線はプラスチックの積木)</p>	<p>図6  図7  (注、斜線はプラスチックの積木)</p>	<p>図10  (注、斜線はプラスチックの積木)</p>	<p>図11  図12 </p>
保育室 での遊 び	<p>ブロックで箱型を作り「オウチ」と呼ぶ。屋根にあたる部分と出入口と思われる部分があいている。箱型を向い合わせに蛇口の下に置いて水を流す。</p> <p>保育室の床に自分でマンホールを書く。</p>	<p>保育室の床にマンホールを書きまくる。</p> <p>机の上一面に渦巻模様を書いたり、壁の高所に大きなカンキセンや時計を書く。</p>	<p>殆んど一日トランポリンの上で過す。数十枚のレコードをトランポリンの上に乗せて、その中で飛んだりはねたりする。</p> <p>トランポリンをやりながらレコードを聞く。</p>	<p>レコードをかけることが多い。</p> <p>カレンダーを作ること要求する。</p>
保育室 での作 品	<p>図4  カベ</p> <p>図5  箱積木</p>	<p>図8  図9 </p>		
セラビ 一室で の遊び	<p>私に絵を書くように要求する。「マル、サンカク、シカク、ヒシガタ、オヒサマ、エントツ、ケムリ」等が多い。</p>	<p>下に絵を書いたカレンダーを作ること要求する。作ったカレンダーは一枚ずつめくり捨てるか、全部持って帰るかする。</p>		

第Ⅰ期、Ⅱ期、Ⅳ期ではマンホール作りに熱中し、他の生活場面では落ちついていた本児は、第Ⅲ期にはマンホール作りに余り熱中せず、他の生活場面では落ちつかず、奇声をあげたり体をくねくねさせたりしている。

ある面で混沌としていた本児が、流れ吸い込まれて行くということに興味を持ち、カンキセンや水の流れを見ているうちに、流れそのものの中に入り込んで、眺めたい、流れを肌で感じたいと思うようになったのではないだろうか。外から流れを見ている第Ⅰ期の初期から、本児は自分の手で流れを作り出せる砂場の遊びを見出したのではないだろうか。第Ⅱ期になると、外から流れを見ているだけではなく、流れに参加し、体験するために、乾いた砂を自分の手でマンホールに落とし、ながしに押し込んだのではないだろうか。流れになった本児は、砂場だけではなく、部屋にいる時も流れるために、床にマンホールを置き、壁にカンキセンを書いたりするようになったのではないだろうか。尤も乾いた砂を使ったのは、砂場が乾きすぎていたり、湿りすぎていたりすると、砂がすぐ水を吸収したり、マンホールが崩れたりして水の流れを見ることが出来なかったためとも考えられる。第Ⅲ期は、流れを体験し、流れそのものになっていたかった本児が現実生活で混乱を起すようになったのではないだろうか。混乱を起すようになった要因として、外見からはわからなかった本児の身体の調子や、第Ⅱ期以後打ち切った個人セラピー等が考えられる。個人セラピーを打ち切った当時は、対人関係において私を道具の人間として扱うことが少なくなるといった好ましい状態であったので、一対一の個人セラピーより子供同志の働きかけの多い保育室で長時間過ごした方がよいと考えた。然しセラピー室でのセラピーは本児が流れのイメージから解放される唯一の場所として意味があったと考えられる。第Ⅳ期になると、再び自分で流れを作り出す砂場遊びを始めるが、それを客観的に眺めているような気がする。流れに没りきっていた本児が、流れの中から顔を上げて外を見回しているようである。

溶け込んでいる流れの中から抜け出した時、本児の新しい段階が始まるのではないかと思われるが、溶け込んだ流れの中から抜け出るには、大変な労力と時間がかかるであろう。

4. マンホールのイメージが現われるまでの 保育者との関係

本児を前担当の保育者から引き継いだ時、驚く程円滑にレポートがついたように思った。初めの数回の保育中は前担当者と間違えられているのかと思った位であ

る。然し本児は人の区別は、はっきりして前担当者の名前と私の名前とをとり違えたこともない。前担当者のことは明らかに認識している。本児にしてみれば、保育中は自分の側にいつもいて、困った時に助けてくれる大人であれば誰でも良いということだったのであろう。担当者が替ったということは、本児に対する扱いがそれ程違ったものでない限り、何の支障も起こさないものであったのだろう。本児のこうした保育者に対する態度は初めの頃は非常に有難かった。私のやるべき事ははっきりしていた。本児の特徴的なアクセントや、はっきりしない言葉が母親の助けなしに段々わかって来たり、長い保育時間のうちで度々、本児の方から私に要求して来る仕事があったり、「ダッコシテ」と私の膝にのって来たり、保育中どうしようかと迷う暇などなかった。然し本児の言葉や要求に慣れて来ると本児の私に対する態度にも足りなさを感じるようになったし、砂遊びが気になるようになった。時々いかにも道具のように私を使うことがあったり、年2回程ある運動会や遠足の時などには、母親としっかり手をつないでいて、私が側にいっても堅い表情を崩さず、見知らぬ人のように私を見る。砂遊びは一日中やっているのではないかと心配になったり、この遊びが一生続けられるのではないかと不安に感じたりした。何とか他の遊びにも目を向けてもらいたいと、私の方からいろいろな誘いをかけるが、本児はそれ等の誘いに全くお義理でつき合うといった調子でのって来ることがあったが、すぐ又砂遊びに戻ってしまうことが多かった。一日砂遊びをしている本児の側にいて私はどうしようかと落ちつかないことが多くなった。そのうちに、この遊びは本児が自分自身で見つけた本当に熱中出来る遊びであり、それだからこそ本児がもう充分だと感じるまで待つてあげれば良いのではないかと考えるようになった。こう考えると一日砂場にいる本児の側で私は全面的に本児を受け入れることが出来たように思える。

5. おわりに

マンホールは、下水という水の流れを擁した地下と、地上とを結ぶ一地点である。この1年間の本児の主な遊びは全てマンホールのイメージと結びついている。ある面で混沌とした地下世界にいる本児が成長し、無意識に地上に出ようとしているのではないだろうか。まだ本児は流れの中に浸っているが、これから徐々に流れの外に出て行くのではないだろうか。

A Case Report of a Mentally Retarded Boy
—Process of his Play with Something flowing—

Taeko Nakazawa
Dept. 8 Naoko Miyamoto

This is the report of a boy who was born in 1964 and has been suspected of autistic emotional disturbance or mental retardation. He has been treated twice a week in the Nursery School for the Young Mentally Retarded Children of Nippon Aiiiku Research Institute. The report is centered on the process of his play during one year when he was 4 to 5 years of age.

He likes the image that something is flowing, running and absorbed in. The therapist's connection with him began with a manhole and ended with a manhole. His playing with the image of flowing was changed as shown in Figure 1 to Figure 12 during one year. He who had been much interested in the water running, flowing and absorbed in came to make a manhole and a basin in the sand-box. By doing so he seemed to get himself into a flow, to experience in flowing, and then be trying little by little to get out of the flow. It is supposed that he who has been in a chaotic world in some phase is now growing and stepping out of that world.